

離島・僻地医療を担い 39 年——NPO 法人日本医学ジャーナリスト協会西日本支部（事務局・福岡市）は、設立総会（7 月 8 日）に合わせて記念講演会を開き、人気コミック「Dr.コトー診療所」のモデルとなった外科医、瀬戸上健二郎さん（76）を講師に招いた。瀬戸上さんは、医師不在で起きる離島医療の悲劇を断ちたいと当時の村長から頼まれて、1978 年、鹿児島県の離島・下甕島の手打診療所に赴任。約 1 時間半の講演では、「何でもあり」の地域包括医療や、人情豊かで親切な島の人たちとの様々な出会いに魅せられて「島酔い」し、2017 年 3 月まで 39 年間にわたった離島での医療を振り返った。

報告・尾賀始

「離島医療 39 年 情報は一瞬」

外科医 瀬戸上 健二郎さん

「半年間」の約束のはずが

鹿児島県いちき串木野市から西に約 45 分。瀬戸上さんが所長を務めた「薩摩川内市下甕手打診療所」は、東シナ海に浮かぶ甕島列島・下甕島の南端にある。

朝夕の海に太陽が輝き、古くは「五色島」とも呼ばれた美しい島だが、本土との交通手段は船しかない。台風や季節風で海が荒れると海路は遮断され、緊急搬送のヘリコプターも近づけない。離島医療の歴史には、腹部打撲の若者が苦しみながら命を落としたり、盲腸（急性虫垂炎）の患者が搬送中に漁船上で死亡したりと、悲しい話がいっぱいある。天寿を全うしても、医師がいなくて死亡診断書がもらえず「島では死ねない」という状況もあった。

離島医療は「医者探しの歴史」でもある。瀬戸上さんは、鹿児島大学医学部を卒業、同大第 1 外科に勤務し、国立療養所南九州病院で外科医長まで務めた。病院を辞め、開業の準備をしていた時、当時無医村だった下甕村長から「開業までの半年でいいから、ぜひ来てほしい」と請われ、海を渡った。

当初は本当に半年のつもりだったが、修練した腕を島民のために生かす達成感は大きく、医師としての魅力的だった。離島の医療悲話、総合診療医としての挑

戦、島の人たちとの触れ合いなど、多くの要因が絡みあって 39 年もの島暮らしとなった。

合併して薩摩川内市となり、市条例の医師の定年は 65 歳だが、特例として更新し、さらに任期付き職員採用法による新条例を定めて 70 歳を過ぎても引き留められた。

自分の盲腸手術が進路決めた

瀬戸上さんが、医師を志したのは高校 3 年生の時、医師に助けられた体験が背景にある。盲腸の手術を受け、術後 1 週間経っても立って歩けず、貧血を起こして倒れた。

付き添いの人のアドバイスで、別の病院の先生に診てもらおうと、内出血して腹部に 1500～1600cc、バケツ 1 杯ぐらいの血液がたまっていた。

この時お世話になった先生に進路を相談。弁護士か医師を勧められ、1 浪して東北大法学部と鹿児島大医学部に合格した。先生に報告したら「弁護士もいいけど、やっぱり医者だよ」。この一言で迷いは吹っ切れ、医学部を選んだ。

外科の世界では「盲腸で始まり、盲腸に終わる」と言われるが、この盲腸手術の失敗がなければ、セカン



離島医療の経験を振り返る瀬戸上健二郎さん

プロフィール せとうえ・けんじろう。1941 年 3 月、鹿児島県東串良町生まれ。鹿児島大学医学部卒。同大付属病院に勤務後、1972 年から国立療養所南九州病院で外科医長。78 年、下甕村（現薩摩川内市下甕町）手打診療所所長に赴任し、39 年間、離島医療を担った。専門は胸部外科。肺がんなどの離手術も手打診療所で成功させ、専門外の内科から産婦人科、獣医まで幅広い分野をこなした。他地域の診療所との診診連携や、研修医の受け入れ、インターネットを活用した医療連携など、離島・僻地医療の改善に努めた。テレビドラマにもなった人気コミック「Dr.コトー診療所」(山田貴敏作)の主人公のモデル。第 25 回医療功労賞・中央表彰、2000 年度藍綬褒章、第 5 回日本医師会・赤ひげ大賞を受賞（章）した。

ドクターとの出会いもなく、医師の道に進んでいたかどうか分からず、不思議な縁を感じる。

手術や透析で実績を重ね

下甌手打診療所赴任は 37 歳の時だった。鹿児島大では胸部外科の研究と臨床に没頭。インターン(当時)では、奄美大島の離島診療所で"恐怖"のお産を診ることになり、助産師資格を持つ看護師に救われた経験もある。南九州病院では医長として一般外科・胸部外科を担い、専門の胸部外科では南九州の第一人者だった。

そんな"名医"を確保した診療所だが、手術台は錆が浮かび、麻酔機すらなかった。病床は 6 室あったが機能していなかった。住民は、医師の赴任を大歓迎するが、それがイコール信頼ではない。多くの手術をこなしてきたベテラン医師でも、信頼を得るのは容易ではない。実績を重ねながら、時間をかけて信頼関係を築いていった。

赴任して取り組んだのは、厳しい環境で、島民の医療の最後の砦となるべく、様々な手術・診療ができる環境を整えることだった。行政の支援を得て、不十分だった設備やスタッフの拡充に努め、1986 年には現在地に新築移転した。

診療機器・装置は、酸素ボンベに始まり、麻酔機、X線透視撮影、X線デジタル化処理撮影、電子内視鏡、超音波診断とそろえた。当時はぜいたくとも言われた CT(コンピューター断層撮影)装置を導入し、人工透析室も配置、本土に渡らなくても治療ができるようにした。病床数は 19 床に増え、赴任当初 2 人だった看護



薩摩川内市下甌手打診療所の外観。内科、外科、小児科の 3 診療科で、ベッド数は 19 床

師は 10 人以上となり、やはり当初 2 人だった事務スタッフも倍増した。

専門外の産婦人科や獣医まで

訪れる患者は多種多彩。漁師町らしく、釣り針が自分の手の甲や唇に深く刺さったり、耳にひっかけて母親を釣り上げたり、エイの"殺人剣"に刺されたり、サメやカメにかまれたりという症例もある。本土での出産を予定していた妊婦が、周産期のトラブルで飛び込むこともある。時には、マムシにかまれた犬や、けがをしたカモメまで運び込まれる。診療の範囲は、内科、外科から産婦人科、小児科、精神科、さらに獣医まで幅広くカバーしなければならない。専門の胸部外科に加えて、島で勉強して帝王切開や人工股関節、ペースメーカー植え込みなどの技術を習得した。

島の人たちと生き物への真摯な対応で、次第に「命は神様(寿命)に、病気は先生に」と言われるようになった。医療に飢えていた島の人たちに、確かな診療を提供して喜ばれるのは医者冥利に尽きた。

信頼関係ができてからは、盲腸や得意とする肺がんの手術以外に、食道がんや皮膚がん、骨盤骨折、緊急帝王切開、緊急子宮全摘など様々な手術症例を「やらせてもらった」。窒息死の恐れがある急性喉頭蓋炎の患者さんを往診し、気管切開で命を救ったこともある。また、腹部大動脈瘤の患者さんに、本土の病院での手術を提案したが「診療所で瀬戸上先生に執刀してほしい。他には行かない」と言われ、本土の仲間の医師の協力を得て離島の診療所での前例のない難手術を成功させた。

本物の「総合診療」を実体験

島での症例はまだある。子供の腸重積(腸閉塞)や高度経済成長時代の置き土産ともいえるアスベスト肺、サバなどの寄生虫によるアニサキス・イレウス(腸閉塞)など、老若男女、様々な症状の患者が飛び込ん



いちき串木野港から西へ約 45^分の下甌島。手打湾岸に約 2^分の砂丘が並び、周辺に集落が広がる。中心部には下甌手打診療所のほか、薩摩川内市役所下甌支所、同市立手打小学校などがある(写真上 = 甌島観光協会ホームページから)



講演会場となった西南コミュニティーセンター（福岡市早良区）には会員以外に一般の市民も訪れた

でくる。人ではまれなフィラリア症（犬糸状虫症）や、「お尻から紐？」が出て検査するとサナダムシだったりと、今では珍しい寄生虫も見つかる。臨床の現場での一瞬の情報を的確に見極め、また隠れているメッセージを掘り出して診断、治療しなければならない。

助かる命ばかりではなく、本土に緊急搬送した患者が遺体で帰ることもある。「何でもあり」の離島医療は、本物の総合診療が求められ、プライマリケア能力の養成に適している。研修医用のマンションを設け、総合診療医（ドクター G）を目指す若手医師らを全国から受け入れ、「大病院に慣れ甘ったれた自分を鍛え直すことを目的に」と、留学研修先の米国有数の総合病院メイヨー・クリニック（ミネソタ州ロチェスター市）から訪れ、島に1か月滞在した医師もいる。JICA（国際協力機構）を通じてモロッコなど海外からの研修医も受け入れ、専門化・細分化された都会の病院より自国の地域事情に合った実地研修ができると喜ばれている。

ICT 時代先取り、遠隔診断も

研修医は、マンパワー不足の離島医療の大きな戦力でもある。島で学ぶことがある一方で、新しい時代の教育を受けており、相互補完的に大学病院などの先進的知識・技術を提供してくれる。エイズ感染症や選発性イレウス（腸管狭窄）などの診断で、若手医師に教えられたことも多く、診療所は「協働共学」の場になっている。「Dr.コトー診療所」モデルの「瀬戸上先生の下で」と、研修先に選択する医師も多く、若者に夢と希望を与えるこのコミック作品の好影響がここでも出ている。

時代は進み、医療の進歩も速い。離島のハンデを埋めるため、ICT（情報通信技術）を活用した医療連携も積極的に進めた。インターネットの普及で、どこでも情報のやり取りができるようになり、例えば解離性動

脈瘤を疑う画像を、遠く離れた専門医に送って遠隔診断してもらおう。誰に診てもらおうか？ 時間外の対応は？ など課題もあるが、専門医を確保したのと同じ効果があり、限りある医療資源を効率的に使える。超高齢化時代を迎え、遠隔診療のプラットフォームづくりが日本でも本格化する中で、時代を先取りした取り組みとなった。

お別れ会 250 人が感謝の笑顔

下甕島の人口は、戦後1万人を超していたが、赴任当時は約5200人、現在は約2250人にまで減っている。講演では、日々の診療の際に愛用したわら草履を作ってくれたり、ミカンが実ると「1番は神様、2番は先生に」ともてなしてくれたりした島の人たちを紹介。手術で回復した患者さんから贈られた絵や手紙もあった。Dr.コトーにも登場した離島医療の先輩を称える「往診の道すがら…」の句碑や、往診の際に愛用した民家の昼食がNHKテレビの「サラメシ」で放映された話題も楽しく聞かせ、コミュニティーに溶け込みその土地と人々をいかに愛していたかをうかがわせた。「患者さんのために」と共に学び高め合い、人工透析導入の際には驚異的な速さで技術を習得してくれたスーパーナースの存在にも力を込めた。

今年4月、島を去る時に小学校体育館で開かれたお別れ会には、島民約250人が集い、感謝の笑顔が広がった。看護師が踊り、その輪に瀬戸上さんも加わった。「心が平和な島の人たちがいたから、39年間やって来れた。離島医療は厳しいけれど、面白かった、楽しかった」。島を離れて鹿児島市に移り3か月余。ゆったりと時間が流れ、人々と気持ちが通じ合い、充実していた島の生活に改めて思いをはせている。

（おが・はじめ＝医療ジャーナリスト、元読売新聞記者）

* 演題「赤ひげと医の自分～離島医療39年を振り返って」は「離島医療39年 情報は一瞬」に変更されました。